

震災特集



＜ニセコキャンドルナイトの制作に合わせた樺山分校の児童＞



＜3.11を偲ぶ会＞

東日本大震災から一年。
東北地方を中心に未曾有の大災害に見舞われた日本。
あの日から一年。
東北へ向け、俱知安では数々のイベントが行われた。

俱知安の3月11日は



＜ハートフルバザー＞



＜ニセコキャンドルナイト＞

哀悼の灯

ニセコエリアの観光団体が呼び掛け役となつて、リゾートエリアを中心に各施設で、震災から一年の追悼として「ニセコキャンドルナイト」と称したイベントが行われた。

ひらふ地区では20人程がキャンドル作りに参加し、約2000個のキャンドルに火を灯した。リゾートエリアにもたくさんさんのキャンドルが灯され、訪れていた観光客もキャンドルの灯りを見つめながら、震災で被災された多くの方々に哀悼の意を示した。

また西小樺山分校の生徒たちもニセコひらふ安全センター前のキャンドル作りに参加し、東北へ向けて灯りを灯した。

ハートフルバザー大盛況

ある場所では、また違った11日を迎えた。会場となった中小企業センター前は開場前から多くの人が集まり行列ができるほど。昨年、被災地を視察し、継続的な支援の必要性を痛感していた町議会議員らが呼びかけ、

商工会議所はじめ町内の多数の団体が協力し開催された。ところ狭しと並べられたイチゴやたまご、電気製品、生活雑貨など500点あまりが、瞬く間に完売となった。

開場での募金とあわせ、約43万円は全額被災地石巻市へ届けられる。

三線を奏でる医師

「3.11を偲ぶ会」と題された活動報告会は震災からちょうど一年後の3月11日に開かれた。会場のドアを開けると、沖縄の伝統楽器「三線」を片手に談笑している大泉樹タツさんの姿。

NPO法人「どさんこ海外保健協力会」以下「どさんこ」のメンバーとしてカンボジアを中心に数年前にわたり医療活動を行っていた。平成14年から留寿都村診療所所長として赴任。二年後には「どさんこ」の代表も勤め現在に至る。

昨年3月はカンボジアに行く予定だったが、東日本大震災による支援のため予定を変更し、急きょ被災地へ、到着してすぐ宮城県名取市で医療活動を行って

からは、4月以降気仙沼市での支援活動が現在も続いている。偲ぶ会では大泉先生の東北での体験談や、地元介護施設の立ち上げや、仮設住宅のコミュニティ作りで尽力している地元団体「生活支援プロジェクトK」などの活動が紹介された。慢性疾患の薬が足りない、花粉症・喘息の悪化、不安発作や不眠といった症状が外来患者に多いことや、点滴を受けた患者が「避難所が寒くてあと一時間だけ居させてほしい」と訴えた現状など、報道等ではなかなか知ることのできない話を聴くことができた。

一方で、東北の季節行事「芋煮会」で「どさんこ」チームが出品した「芋もち」は東北の人には珍しいものだったらしく大好評だった。趣味の三線の演奏でたくさんの人とコミュニケーションをとってきたという体験も語ってくださった。

当日は大泉先生と、今回の企画立案者である佐々木景子さんのミニライブも開催された。三線とアコースティックギターによる「涙そうそう」や「ふるさ

身近に感じる一日に

被害を受けた東北地方を思い、様々な企画がされた俱知安町内の3月11日。最後に「3.11を偲ぶ会」の企画・進行を務めた佐々木景子さんが、偲ぶ会をやるうと思つたきっかけを語ってくださつたので、以下に記す。

3月11日、誰か何かやらないのかな。そう思つた瞬間、「自分」と向き合いました。メディアでは一日中追悼番組を行い、一年経った過酷さを知ることばできませんでした。被災地で活動されている方からの思いを實際に聴き、身近に感じることができたと思います。まずは第一歩なので、友人やブログを中心

と」を弾き語り、聴衆一人ひとりが東北へ思いを馳せた。

二年は区切りじゃない」と大泉先生は言う。これからは外部支援の継続に加えて、地元の方の再生が鍵となる。東北から遠く離れた私たちが、一年経って今後どう支援していけばいいのか。支援の形を再考する必要がある。

に呼びかけ、小さく行わせて頂きました。大泉先生とは、昨年から留寿都村で沖縄の音楽活動と一緒にいて、気仙沼に通う忙しい中でしたが、この大事な日に俱知安に来て頂けたこと、この日の御縁に感謝です。写真で紹介する中で印象的だったのが、私達は「生き残った」という思い。いつどこで遭うかわからない大災害は、誰もが人事でも過去でもありません。現地の医療関係者も被災者であり、ぶつけようのない無念さの傍で支え続ける一年。そしてこれから、いかに「日常」戻すために生活と心を整えるかの大変さを感じました。俱知安に住む東北出身の友人達も、「ふるさとへの思いで悩むことも多い」と感じます。まだまだった一年、小さくても一歩動くことを恐れずにいければと思います。今を生き延びる一人一人がそうあるように願います。